

算
根
集

算
根
集

(非 売 品)

ノートルダム 古典叢書第九回配本「草根集」
清心女子大学
四 雑 二八
その他

昭和四十八年八月二十日発行

刊行責任者 シスター・セント・ジョン

翻刻責任者 白 井 た つ 子

発行所 岡山市伊福町二丁目一六の九

ノートルダム 清心女子大学 国文学研究室古典叢書刊行会

(振替 岡山・七二三)
電話 五二一一五五

印刷所

姫路市別所町印刷団地

岸 本印刷株式会社

草根集 四 目 次

雜		1
卷子本 草根集 戀		155
草根集 殘葉		175
北野法樂詠百首和歌		221
解題		237

草 根 集 (雜)

雜

八五七

二 つりの糸に一たひかゝるうるくつのひかるゝほととの命をそしる

天

八五八

二 いそくらしかたふく月の明かたに天の戸たゝくみねの黍風*

八五九

七 あふき見よむなしき空をふもとにてたかき所は心也けり

朝

八五四〇

十三 おこたるをすゝめし舌さへくたりにきあはれたえたる朝まつりこと

朝 雲

八五四一

十三 今朝も見よ夕の雨とならぬまの雲とたなひく山のかたみを

夕

八五四二

一 いたつちに暮ぬとたにもきかぬかな我身舌にふる入あひのかね

八五四三

一 おしまるゝ七夜のうちに在明の又ゆふ月となるもほとなし

八五四四

二 あすしらぬ身のうき時を夕暮のならひになして又やすこさん

八五四五

十二 よもしらし風のやとりは尋ぬとも夕の雲のかへるところを

八五四六

三 入と見し雲やはのこる峯とをきゆふへの鳥のあとの山風

山

八五四七

六 石はしる瀧なき山の尾上なる白玉つはき千舌のかすかも

八五三八 黍風—松風
八五三九 也—なり

八五四

年をへて山に心をかけし吾もおもひたえぬる遠の白雲

八五四

すかたさへけはしからぬや皇の都のよもの山となりけん

八五〇

一 それも猶ゆへありけめやすへらぎの國は日本日の枝の山

八五一

神もさそけふの手向をまつ山の松の千とせと君まもるらん

八五三

二 吉壁山代々の御幸の初よりふみならしけん岩のかけ道

八五三

三 明わたる横雲かけて乙女子かけふも袖ふる山かつらかな

八五四

九 ことのはももき木と成て老ぬれは心あさ^{か*}の山の井の水

八五五

八 幾舌へぬ山となりにしあわちより峯にたえせぬ雲のはしめは

八五五

十三 足ひける山なれはとや舌の中のうきを江にしておかけかくすらん

八五七

白浪に命をかけて山ふかく身をかくす人も此比はなし

八五八

十四 さしてくるしほにうかへて宮木引つなてやかろき浦の杣山

麓

八五九

二 うち山のふもとのま柴かりこめていさよふ浪にくたす舟人

麓

八五〇

六 川浪も山かせなから夕日影さはくふもとの奈のした柴

八六一

廬むすふもとのま柴かりの舌をしれとにはあらしはこふ山人

八六二

八 夕日さすふもとの壁へに数しらす柴ふりたてゝつゝく山人

八六三

十二 ゆふ日さすふもとの山路山かつの柴もちつゝくかけそ暮行

八六四

十三 杣木引ふもとのま柴からすして根をたえ行を哀とそみる

八五五四
あさ^かのーあさかの

麓 杉

八五五 八 草たかきふもとの壁へのさゝの廬しるしとたのむ杉の一本

薪

八五六 十 鷺の山薪つくれば火も消ていくとせ冬の空うつむらん

巖 柰

八五七 七 岩かねのこりしく峯の柰の陰われあらましの廬かむすはん

岩 松

八五八 十一 浪に入みさこそかくるあら磯の岩ねをしまく松のはいえに

岩上松

八五九 六 うら風も柰かねこえてかへるさや岩ほに落る瀧のしらなみ

岡 松

八六〇 十二 松か枝にねてのあさけかをの羽も霜のみをかのやかたおのたか

庭合 欽

八六一 十三 軒ちかく老のねふりをうつす木も身のうきことを夢にやはみん

合 欽 木

八六二 残 日くるれはをのか葉ことに欽を合てねふの木もうらやまし

峯 桂

八六三 残 いつるまの峯のかつらを月のうちに今夜はふしてみるもほとなし*

椿葉伴 齡

八五七四

十のかす八をの椿友とみん花もふりぬる雪のすかたを

嶺 椿

八五七五

たかね行たよりにみかく玉椿光あらはせかつらぎの雲

澗 檜

八五七六

三 檜の葉の軒をあらそふ谷の屋とよそけにたてる檜原杉むら

杉

八五七七

十一 人はこてあらしそくるゝ杉のもとあまたふみたる道のさゝ原

門 杉

八五七八

六 たれかすむ尾上にたてる杉のもと松の門さす苔ふかくして

八五七九

二 明わたる三輪山かつらゆふかけて神かきしるし杉たてる門

八五八〇

九 松の戸のさし入にたてる杉村に山おくふかきすみかをそしる

八五八一

十三 軒ちかくならへうへても友ならしふりぬ高砂住の江の姿

八五八二

十四 里に入門の前なる杉むらにふかさあさゝもみえぬ山かな

桐

八五八三

七 一葉より秋のあらしに散はてし梢の霧やなをのこすらん

柏

八五八四

十 山とみるひろはもかなや此比のなかめかしはの雪の千枝に

杜 柏

八五八五

三 もりかねぬひろはかし葉も所せくならふ梢のかけの山かせ

八五八二
みえぬー見えぬ

八五六 九 ゐる雲の衣のうらの玉かしはかつあらはるゝ^杜奈の明ほの

八五七 十 柏木のちりしは守もいつくにて森のみとりの春を待らん

草

八五八 十二 我廬はよもきか柚の陰なれは真木の屋ならふ草のかりふき

麦門冬

八五九 残 つるにわか身を山菅のかりの舌をいつまでよそに思みたれん

王昭君

八五〇 涙のみ先立けりな四のをの聲にひかるゝ駒もかへらて

李夫人

八五一 なにかせん煙のうちの面かけの消てむなしき後の思は

楊貴妃

八五二 鳥となり枝ともならむことの葉は星の逢にや契定めし

陵園妻

八五三 たをやめかつらき心もうつろはて挿^(かざし)むなしき園の白きく

上陽人

八五四 六 きゝねたゝ身は光なき闇のうちにくらき雨きく窓の灯

八五五 人ならぬ身を梁のつはめたに心やすめてならひやはせぬ

八五六 七 五十年よ一夜になとかおとろへぬ窓うつくらき雨にふる身は

八五七 残 夢にたに契むなしき灯の窓うつ色のくらき夜の雨

遊士出山

八五九八

六 月もしれいてすそあらむかつらきの峯のひしりも舌の人の為

陰士出山

八五九九

七 舌にいてゝけふもかしこき人あらはもとのみ山に雲やかへらん*

薄暮煙

八六〇〇

六* 河上やくるゝゆつのはの村雲をひとつになして立けふりかな

八六〇一

もよひするさとゝ見なからかなしきはつるの夕の煙なりけり

温泉

八六〇二

十二 ありま山夜ふかき里はもよはねと出湯のかたにあさけをそみる

八六〇三

十四 むすひても今はなにせんいよの湯のめくる数にもあまる齡は

八六〇四

残 いつる湯に水の煙を時しらぬ山はありまの末の川なみ

八六〇五

ありま山仏の身よりいたす湯に清さとりもなとかなからん

八六〇六

此比は伊与の湯けたの五百八十にかそへて人の年を祝り

出湯

八六〇七

九 くま壁路や雪のうちにもわきかへる湯の峯かすむ冬の山風

不盡山

八六〇八

十二 久かたの雪に契てあらかねの土よりいてしふしの四方山

寄橋雜

八六〇九

七 をく霜の我身にふりぬかさゝきのわたせる橋もなかき夜のそて

八五九九 らんーらむ

八六〇〇 六一ナレ

八六〇五 仏ー佛

寄鷹雜

八六〇

はし鷹も久にあひ見ん君かため千世をこめてやと屋かへるらん

寄木雜

八六一

たえねたゝうきて此吾を杉舟の身さへ朽ぬるしるしたになし

寄鳥雜

八六二

見しはみな遠山鳥のおろかにも行末なかくたのむ老かな

寄衣雜

八六三

心をはそめすよいかゝしかまなるかちの衣は身にかゝれとも

八六四

朽ねたゝ苔の衣の身にあるも人の岩木にかゝるとそ見ん

八六五

うは玉の色を衣の袖もひすさよふ心のやみの夜の雨

寄市雜

八六六

ちりの市のかくれし仙人も昔かたりの年そつもれる

寄枕雜

八六七

年ふれはかしらの霜をこすけゆふ枕の上にをかぬ夜もなし

寄水雜

八六八

なにかせん魚なき水は清くとも此吾に友のとひこさりせは

八六九

いつまてか壑中のし水ぬるき吾もありしを忍ふうき身なるらん

寄舟雜

八七〇

うきせにもよも立はてし早川に舟なかしたるあまの此身は

八六二九 なる一成

八六二 十二 あら海の浪に舟木はうすくともものらぬ命をたのみやはせん

寄 苔 雜

八六三 草のかけ苔の下にもうつもれぬ名を思ひしは昔なりけり

灯

八六三 七 消はてぬ露の光と見るはかりかへの草葉に残る灯

八六四 十 かすみ行老のひかめの輪のうちに見えぬ夜もなき燈の影

夜 燈

八六五 一 照すまでかゝくことはかたくとも法にそむけぬ灯もかな

八六六 二 そむけをくかへなる草のことなしに過てくやしき舌ゝの灯

八六七 三 いつまでかこれにもそはむ深はつるわか影うすき夜はの燈

八六八 十三 明ぬまも消れはきゆる灯の中にすむてふ虫の命を

八六九 かゝくれは消ぬや露にまさるらん壁の草葉にかゝる灯

深 夜 燈

八七〇 十二 いかゝねむ窓うつ雨に灯のみしかくもえてななき夜の空

曉 燈 欲 消

八七一 十三 明ぬまはうつろひ消な月草の花に色かるともし火の露

灯 欲 消

八七二 六 あけよかし消なんとして光ます夜はの灯くらきまぐらは

窓前燈

八六三 十 ともすてふ窓に光はうすくとも消やらぬまをしはし友なへ

窓 灯

八六四 六 かゝけてもみしかくもゆる灯にあすの雨しる夜はの窓哉

八六五 一 ね屋もあれ窓もふりぬと灯の光にならふほしの影かな

八六六 八 かゝけても影そけたれん紙の窓にすきたる月の残る灯

八六七 十 あれにたる窓の北なる星月夜又灯をならへそてそみる

八六八 十一 明やらぬ雨に窓うつかへに耳きくもかすかにのこるともし火

八六九 十四 灯をかへのすきまになひかして影うすくこき窓の北風

閑中灯

八七〇 六 くらくなり又あかくなる灯の消まくちかく夜はふかくして

八七一 八 まなふともとの心のくらき身はかくてや杉の窓の灯

八七二 八 ぬ人はうき灯の花そめをかへなる草の袂にそみる

八七三 一 燈の影もすくにと身をそ思ふ窓のすきまの風ふかぬまは

八七四 一 明ぬるかかへにおふてふ草の名のみなしろくなる灯のもと

八七五 二 夜やふかきたれにとはまし灯の残りおほくもさむる夢哉

八七六 七 おもかけの残る灯夢覚て古にし人の玉かとそみる

八七七 十一 横の戸のすきまの風も灯の影ならはしにのこる夜は哉

八七八 八 かゝけてそ聞もにきはふ音なくてあまりしつまる夜はの灯

八六三七 ならへそてーならへて

八六四二 みるー見る

八六四四 おふーあふ

八六四六 みるー見る

八六四

十三 友もあらし油はつきて光そふ闇そ夜ふかき秋のともし火

閑中日長

八六五〇

うこかきて心のやとり身をゝけはけふの春日に過る百年

閑居

八六五一

一 岩かねの苔の雫も木かくれてをとに心をすます宿哉

八六五二

すみあかし山ならずとも心から身をしつかにと思ふやとりは

八六五三

かたるへき人しとはねは思ふことなきにもにたるすみか成けり

八六五四

二 木かくれてすみやははてん絶すぎる杣のかり屋のしはし斗は

八六五五

六 廬ちかく鳥の鳴日もまれにして林あれ行風の音かな

八六五六

うかるへき軒はの奈の風をたにきかぬ日おほくらす宿哉

八六五七

十二 たよりありて人すむへくも人やみぬ嵐のおくの苔ふかきそて

八六五八

十三 ひたすらに山かたつかぬ宿ながら里はなれなる竹のおくかな

八六五九

十三 すみからはたゝよく心しつかにて身の涼しきそ風にしられぬ

八六六〇

残 よるゝそかたらひ明す我影のおひすみしけるやとの灯

閑居木

八六六一

六 身をかくす宿ともたのむうつほ木のむなし心をはらふ山かせ

八六六二

いかてかく我を岩木となす廬は心もなきを人のとふらん

閑居曉

八六六三

二 みねに出るほしとや見まし曉の雲にそむくる宿の灯

閑居友

八六四 七 なきかけをふたりやとはむ水の音松の嵐の友をのみさは

古 郷

八六五 一 花そのは跡こそみえね志賀の浦泰に昔のことやとはまし

八六六 ふるさとゝならのあすかにとふ鳥のこゑも昔の友や戀しき

八六七 みかの原郡(くに)の都はかりそめに住こし里も道そのこれる

八六八 今はとてすめるなにはの宮こ鳥さそうち川の汀こふらん

八六九 けふまでも住めは住□古郷とならるあすかのあすしらぬ昔に

八七〇 名そのこるいつくを見るも古郷となれる所は跡かたもなし

八七一 二 思ひやれなれし都を古郷となして住うき山の廬を

八七二 六 たをやめの昔ゝふる袖のかたみとやならの飛鳥に雲残るらん

八七三 八 わすれすやいまをひらのゝ杉し世はありしなにはの古郷のかみ

八七四 むかし今かはるふちせを昔にやみぬならのあすかに河はなけれと

八七五 十 あれはてぬ昔そ猶も古郷とならる葉もりの鹿のふしとは

八七六 住はつる人のふりにしかすよりはあれさりけりな軒はもる月

八七七 十二 あれわたる里はあすかに飛鳥もいく昔すたちもこゑのこるらん

八七八 あさちふも道は枕にのこるとやたれに見ゆらん古郷の夢

八七九 十三 すむ人もたえにし秋の古郷とならる落葉のしたの通路

八八〇 こゝよりや古郷なりきかし原の宮のあれにし昔ゝのはしめは

八六六五 みえねー見えね

八六七五 あれはてぬーあはれはてぬ

ぬ

八六八〇 昔ー昔々

八六八一

ふるさとゝならのはもりの神さひて山風わくる道のさゝ原

古郷夢覚

八六八二

九 月はとへ見し杵はかなくさめぬともたれにかたらん古郷の夢

古郷路

八六八三

六 見し人のなきかおほかる古郷にあるはかなき道芝の露

八六八四

十 すむ人もふるの中路いつの世か篠わけさりしちりはらひけん

古郷竹

八六八五

六 百敷のうてなやあらず高圓の尾上の竹の代々の山かせ

古郷草

八六八六

六 ふるさとのこれや柱の跡の石むなしき壁へに草かくれつゝ*

八六八七

六 道もせに年々草はたねそひて見し杵そかゝる古郷の夢

八六八八

露そちる浪にあらさぬ磯の上ふるき宮このおくのさゝ原

古郷木

八六八九

十二 うへさりし奈も嵐をやとすなり猶すみすてしあるゝ古郷

古郷松

八六九〇

二 松たてるしかのから崎ふるき杵をとひてそかへるにほのうらなみ

八六九一

三 尾上にはのこる奈のみ高圓の宮のふる道あふ人もなし

八六九二

十二 これまでやなにはの宮のたかき屋に煙をそへてみつの濱松*

八六九三

十二 から崎やいく杵の人にふりぬらん真木の戸川の明ほのゝ奈*

八六八二 見しナシ

八六八六 草―夢

八六九二 濱松―濱奈

八六九三 奈―松

古郷松風

八六九四 古 いつまてか都の風のかよひけんあれにし磯のかみ寺の奈

古郷嵐

八六九五 十二 軒の奈おち葉をふきて古郷のあれまくおしむ嵐とそみる

八六九六 十三 うらみすや里さへ昔ゝにふるされて山の嵐のとへるはかりは*

古郷雨

八六九七 七 うへをきし昔の人や古郷の草木になるゝ雨となりけん

八六九八 十三 古郷は思ひはれせぬ雨の底いく昔の人の雲おほふらん

古郷夜雨

八六九九 十二 夜もすから聲をそはこふ昔ゝの人雲となりにし古郷の雨

簷忍草

八七〇〇 七 古郷の軒もあらはにあれぬれはしのふにたえぬ草そ枯行

檐松

八七〇一 六 さひしさを軒端の山の奈風にまかせはつれは吹としもなし

草庵

八七〇二 六 たれもわれいつまて草の廬とは見るらん物をかへに生つゝ

八七〇三 草の廬たもとにかゝる糸水に音なき雨を今そおとろく

八七〇四 嵐山あらしやすきもはかなきは草のおとろの道のへの廬

八七〇五 三 夜はの雨きかぬを見るも袖ぬれぬ草ふく軒のせはき住居に

八六九六 はかりは―はかりそは
*そは

八六九九 昔ゝ―昔ゝ